

【交流会】 前日、鎌倉を見学して江ノ島に宿泊した小友中学校3年生14名は、8月30日（木）の10:00、下福田中学校3年生とすたんどばいみーが待つ体育館に、揃いの黒Tシャツとともに笑顔で入場しました。生徒同士でつくる交流会。前日の夜は、江ノ島の宿舎を下福田中の代表委員が訪れて、9時過ぎまで打合せが続きました。夏休みをかけて準備に取り組んだ、三者それぞれの思いで迎える交流会が始まりました。進行役の下福田中の川合さんの、緊張した声が響きます。



「生徒同士が中心になる交流会をしませんか？」5月、下福田中の柿本校長から、小友中の加藤校長への提案から始まったこの交流会。実現までには多くの壁がありました。日程はどうするか、教育課程にどのように位置づけるか、資金をどうするか…。そしてなによりも、交流にどのような意味を持たせるのか、ということが最大の課題でした。

陸前高田の街が大津波に飲み込まれたのは、小友中の現3年生が1年生の時です。校舎がのみ込まれ、6名の級友のいのちが奪われ、家を失ったり、家族を失ったり…多くのものを失いました。それから1年半、間借りしている小学校の校舎の1階で、14名になってしまった3年生たちは、亡くなった友だちたちの分もしっかり生きて約束し合って、学校生活を精一杯おこなってきました。この1年半、支援される側として、日本中の人たちから手がさしのべられました。そして時の流れの中で、「がんばれ東北」のかけ声もいまは小さく、か細くなりました。しかし、流され、野原と化した高田の街は、積み上げられた瓦礫の山は、子どもたちが毎日目にする中学校の校舎は、何も変わってはいません。加藤校長先生は言います、「本当につらい記憶、忘れてしまいたいことが多いが、忘れてはいけない思いもあるはずだ」と。私たちが「忘れてはいけない思い」を、これからは子どもたちが発信していくのです。未来に向けて。

支援される側から、未来に向けてメッセージを発信する側へと、その立ち位置を転換した小友の子どもたち。そして、支援する側から、メッセージを受け取り、学ぶ側へと変化する下福田中の子どもたち。また、そこには、外国人として日本に生活することの生きづらさを、言葉にし、行動し続けてきたすたんどばいみーが、あたかも子どもたちの言葉の証人であるかのように寄り添います。この三者それぞれの言葉が紡ぎあわさるとき、そこには、震災以後の日本がめざすべき社会の姿が、浮かび上がってくるに違いありません。

【第1部】 交流会の第1部は、お互いの自己紹介パフォーマンスです。下福田中は合唱と「ヨサコイソーラン」を披露しました。7月、下福田中では全校でのヨサコイに取り組みました。これは、1年生や2年生にヨサコイを3年生が教え、縦のつながりを大事にすることを目的にした行事です。その時の実行委員たちが、元気よく踊りました。

次は小友中です。全員が立ち上がり、自作の構成詩をリレー形式で語り始めました。「…ろうそくの灯りの前で わたしたちは悲しく くじけそうでした。…遺体安置所や友だちの家で 変わり果てた友だちと再会したときは 涙が止まりませんでした。…会いたい …話がしたい …声が聴きたい。…6人の友だちの分まで生きる！ …『夢は必ず叶う』という希望を持ち 一步一步進んでいくことが生かされた私たちの使命です…」

決意に満ちた一人ひとりの表情に、すべての視線が集まります。存在感のある言葉が、

聴く者の胸に分け入ってきます。津波という突然の未曾有の災害に襲われる中でかかえることになった、悲しみ、苦しみ。それでも、お互いが支え合って次の一歩を踏み出す姿が、描き出されていきました。

1部の最後として、すたんどばいみーを11年前に立ち上げたティンさんとサラーンさんが、子どもたちの前に立ちました。日本社会の中で外国人として子どもの頃から生きることは、自分の責任ではない『うまくいかないこと』に囲まれて、隅に押しやられてしまうこと。漢字の宿題を親に聞いてもわからず、困った親の判断でコンビニの店員に聞きに行くことになった小学生の話。そんな「生きづらさ」を感じ続ける自分や自分たちのことを、小友中の子どもたちに語るとき、サラーンさんの目には涙が光り、言葉は詰まっていました。支え合いながらつらさを乗り越えようとしている小友中の3年生の姿と、外国人として、支え合わなければ上手に生きていけない自分たちの姿が重なっていたに違いありません。

【第2部】 交流会の第2部は、それぞれからの意見発表でした。今回の交流会の核になる企画です。三者それぞれから語られる意見が、お互い響き合うものになるのか…それぞれが受け止めることができるのか…。子ども同士の打合せの中でも、お互いの内容については一切触れませんでした。ただマイクの位置と発表者だけが確認されただけでした。はたして、三者の「ことば」は、結ばれていくのでしょうか。それとも、すれ違ってしまうのでしょうか。

意見発表は下福田中の生徒から始まりました。代表の大平君が、正面から小友中の生徒に呼びかけます。「亡くなった友だちのことを私たちに教えて下さい。亡くなった友だちへのみなさんの思いを教えてください。…そして、私たちに何ができるのかが、私たちがいま一番知りたいことです。」はっきりした声です。

この呼びかけに答えるかのように、小友中代表の菅野さんの言葉は、亡くなった友だちへの手紙から始まりました。「元気ですか？そっちからこちらのみんなのことを見ていてくれますか？…私たちの前から消えたのではなく、遠く見えないところにいるのだと思うようになりました。…」語りかける言葉は、優しさに満ちています。「津波はたくさん大切なものを、友だちさえも奪っていったけど、そうしたなかで、何が大切なものなのか、に気づかされました。…残された14人は、今まで以上に友だちを大切にがんばっています。そして、亡くなった6人の友だちもいつも一緒にいます。それが、私たちにとっては自然なことになりました…」

「いつも一緒」が「私たちにあって自然なこと」という言葉は、多くの友だちの死に対する子どもたちなりの「受け入れ方」であり、「のり越え方」なのに違いありません。そして、ここにいたるまでには、わたしたちでは想像もできない葛藤を伴っていたことでしょう。外側にいた人間が、なにか意見を差し挟むこともできないような揺るぎない空間が子どもたちの間にあることを感じました。7月25日に下福田中の生徒が、「交流会へのご招待」のために小友中の教室を訪れた折りに見かけた、黒板の上に掲げられた6人の遺影を思い出しながら、その意味が少し分かったようにも思いました。

すたんどばいみーからは宮脇さんが、どんなに苦しい経験でも言葉にしていくことの大





切さについて、自分の経験と重ねながら話をしてくれました。昨年の4月から支援をおこなっていた陸前高田の避難所で、子どもたちと一緒に「津波の経験を振り返る」取り組みを進めたことも報告されました。最後に、「聞く側の立場」にふれ、人から重い言葉を聞かせてもらうには、どれだけその人間と向き合ってきたのか、今後向き合う覚悟を持てるのかが必要になるのだ、とまとめました。

心配された意見発表でした。しかし、紡がれた糸は、縦糸と横糸になって織り上げられ、一枚の布になっていくように、見事につながっていくようでした。会場は、最後までピンと張り詰めた緊張感に包まれながらも、話し手と聞き手が響き合い、隔たりを越えていったような雰囲気でした。

その後の第3部は、みんなそろってのレクリエーションでした。縄跳び（八の字飛び）やジェスチャー、自分たちの県や国に関するクイズなどで楽しみました。

【夕食会】 この日、小友中学校の生徒は、下福田中の家庭にホームステイです。ホストファミリーや実行委員の生徒たちが一堂に会して、中庭で100人を超える規模の夕食会が催されました。保護者の有志の方がお昼から集まって夕食を作りました。また、たくさんの差し入れをして下さった地域の方もいらっしゃいます。大和市の教育委員長さんもお顔を見せて下さり、賑やかな夕食会になりました。



ホストファミリーとの対面は、双方とも緊張気味。自己紹介もどこかぎこちないものに…。でも、家に戻ってからのようすを翌日に聞くと、小友中の子どもたちから津波のことについて話し始めてくれたところもあり、とても有意義な時間を過ごすことができました。午前中の交流会を終えた下福田中の生徒たちからは、「もっと話が聞きたい」という要望が強く、何名もの生徒たちが、交流会の後半には予定外の参加者として、小友中の子どもたちを取り巻いていました。

【加藤校長先生の講演会】 夕食会が終わり、生徒たちがホームステイ先に到着した夜の7時20分。視聴覚室では、加藤校長先生の講演会が始まりました。下福田中の職員はもちろん、市内の小中学校の先生方や地域の方も参加して、総勢80名弱。用意した椅子では足りずに、後ろの方は立ち見となりました。被災直後の状況を、静かな口調で、写真や動画を交えながら説明していきます。亡くなった8名の子どもたちや遺族への思い。学校再開までの苦難の道のり。そして、入学式と運動会。聴く者の目には、知らず知らず涙が浮かびます。「津波で多くのものを失った子どもたちに、この事実をどう受け止めさせたらよいのか」。被災した校舎とお別れ会。全校あげて、亡くなった友だちを送る追悼集会。文集の発行。被災の現実をこうして整理しながら、一方では子どもたちに一歩踏み出すことを教えていきます。運動会や修学旅行先の銀座での産直品の販売。それらは、地域に元気を届け、復興を心から願う子どもたちの姿なのです。



震災後、日本全国の学校現場で「防災教育」が叫ばれ、様々な取り組みがすすめられています。そのこと自体は決して否定されるものではありません。しかし、もう一方では、あれだけの壊滅的な被害のなかで、学校教育はそれでも何をなしえたのか、または、どのような可能性が学校教育には残されていたのかということ、私たちは検証して

おこななければならないのではないのでしょうか。もちろん、いま現在も続けられる、被災した学校それぞれの取り組みを、私たちが少しでも支える力となるように…。

震災の現場で、子どもと学校を守り、最悪の条件の中でも、「未来があること」を子どもたちに教え続ける一人の教育者。加藤先生の物静かな言葉の裏側にある格闘の日々と、覚悟の深さから、参加した者は多くを学ばせていただきました。

【帰路】 31日、全校生徒での「お別れ会」が開かれました。加藤校長先生や滝沢教育長さんの話の後、全員で「翼ください」を合唱し、小友中の生徒たちは下福田中を後にしました。陸前高田の小友中学校に到着したのは午後4時。迎えてくれたのは、保護者のみなさん、先生方、そして、部活中の1年生でした。解散式では、交流会の資金面など外枠の整備を担ったEd.ベンチャーの事務局長より、企画段階でのイメージ以上の内容の濃い交流会になり、支援者として学ぶことの多い交流会だったことが伝えられました。また、帰りの引率を引き受けたすたんどばいみーのチューブサラーンさんからは、交流会を通して自分たち自身もまた一歩前に進めたとの話がありました。加藤校長先生からは出迎えた1年生に向かって、「3年生が学んだこと、3年生が伝えてきたこと、そして、3年生が交流会を終わって感じたことを受けて、1年生も自分たちの思いを伝えてほしい」という言葉かけがありました。紡がれ、結ばれた「ことば」によって織り上げられた1枚の布が、それぞれの明日をつくるべく動き始めたように感じつつ、交流会の幕が閉じました。

【支援隊活動記録】 ■陸前高田支援 ○8月20～21日（第45回）：教育支援チーム「まつ」事務局長補佐 □支援隊メンバー：家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）
○8月28日～9月1日（第46回）：小友中学校交流会引率、教育支援チーム「まつ」理事会参加、Cafeまつぽっくり貸借契約確認署名 □家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）、堀健志（上越教育大学）、チューブサラーン（すたんどばいみー、日本大学院生）、佐々木善仁（教育支援チーム「まつ」事務局長）
■交流会寄付 小西永里子、角替弘規・時本識資、山田哲也、石川和友、堀健志、チャンソワンナリット、大和市国際化協会、加藤咲江、櫻井千夏、萩野谷洋一、大八木直子、松田洋介、藤田武志、中光正、シミズウララ、近藤美紀、志水宏吉、福島聖子、大野かよ、本田恵美子、堀田典子、権田和子、小林西子、家上幹雄、五十嵐千秋・康子、グイキムチャーイ、池田喬、浅沼蓉子、柿本隆夫、清水睦美、清水雄策、保田倉庫、清水寛、菊原博子、佐々木善仁、有本真紀、手塚文雄、吉間里依、馬場有希、松義一樹、内藤順子、斉藤茂男、西館健吾、松永雅文、西岡歩、湘北教育文化研究所、前島玲子（計127万2600円）

お礼 助成金がとれないと決まった時点では、全く資金のめどがたらず、「交流会中止」の可能性もありました。しかし、その頃にはもう、小友中と下福田中の子ども同士、そして、すたんどばいみーとの交流は始まっており、準備途中の中止は心苦しく、みなさまの協力を仰ぐことといたしました。結果、本当に多くの方や団体からご協力をいただき、無事に交流会を実施することができました。心から、感謝申し上げます。この実り多かつた交流会の報告書をつくり、資金の寄付をいただいた方にはお送りする計画を立てています。本当にありがとうございました。

★★今年度末まで支援を継続しますので、今後ともどうぞよろしくお祈りします★★

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180
Ed.ベンチャー東日本大震災支援（エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間3-16-107
Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

